

国立国会図書館



特集 資料に見る日仏交流の歴史

電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」

フランス国立図書館の電子展示会「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」

国際シンポジウム「日仏交流の過去と現在—国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から」

「あの人」に会えた！ 企画展示「あの人直筆」報告

2015.2

No. 647

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
資料請求受付★	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。	後日郵送複写受付★	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30

★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 03(3581)2331 内線25211

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求受付★	月～土曜日 10:00～17:15	後日郵送複写受付★	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	★登録利用者限定のサービスです。	

■見学のお申込み／国立国会図書館 関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。		
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間	火～土曜日 9:30～17:00	資料請求受付	火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日郵送複写受付	火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30		

■見学のお申込み／国立国会図書館 国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

CONTENTS

02 孝経小解 複製本と相違のある原本

今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

04 特集 資料に見る日仏交流の歴史

05 電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」

08 フランス国立図書館の電子展示会「フランスと日本 ひとつの出会い
1850-1914」

10 国際シンポジウム「日仏交流の過去と現在—国立国会図書館・
フランス国立図書館の所蔵資料から」

14 「あの人」に会えた！ 企画展示「あの人の直筆」報告

18 「あの人の直筆」誌上フロアレクチャー

23 関西館小展示の開催とその「再利用」

17 館内スコープ

Facebook はじめました 国立国会図書館の展示
(東京・関西)

26 本屋にない本

- 「知られざる世界への挑戦 航海、探検、漂流を記した
書物百選 学校法人京都外国語大学創立65周年記念稀
観書展示会 展示目録」
- 「館長庵野秀明特撮博物館 ミニチュアで見る昭和平成
の技」

28 NDL NEWS

- 第5回科学技術情報整備審議会
- 韓国国会図書館、韓国国会立法調査処との業務交流
(第5回)

30 お知らせ

- 放送開始90年記念・脚本アーカイブズ・シンポジウム
「脚本アーカイブズ」の新たなるステップへ—未来に向
けた保存と利用
- 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

国立国会図書館の蔵書から

孝経小解 複製本と相違のある原本

大沼 宜規

熊沢蕃山『孝経小解』
写(自筆)4冊
<請求記号 WA17-17>
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2605825>

熊沢蕃山筆 正宗敦夫編
『孝経小解』珍書保存
会 昭和3 1冊
<請求記号 117-177>

まずは、写真1の上部と写真2を比較していただきたい。一目見て、そっくりだと思われるのではないだろうか。それもそのはず、ともに江戸時代の儒学者熊沢蕃山の自筆とされる『孝経小解』なのである。写真1は当館が昭和23年に購入した、井上通泰¹が所蔵していたと伝わる原本、写真2は井上通泰所蔵本を底本として昭和3年に刊行された複製本である。だが、よく見ると右丁3行目の「天爵人」部分や左丁の7行目「不知^{ヨル}して由」部分、8行目(書入を除く)の抹消線など、原本と複製本には違いがある。当館所蔵本には井上の蔵書印も識語もない。井上の旧蔵というのは誤りなのだろうか。

全くの別本と考えるには、あまりに似すぎている。一方、謄写や臨写したものとするには、上述の相違点が不自然であろう。やはり、井上が所蔵していた本が何らかの事情で破損し、現在の当館所蔵本の状態になったと考えるのが自然である。

だが、疑問は残る。抹消線や「由」のルビの「ヨ」など欠損部分は、破損と考えて説明できるが、「人」に重ねて「ヒ」と書きこまれているようにみえること(写真1↓)や、「不知して」の欠損部分に上から薄く何か書かれているようにみえること(写真1↓)は、どのように説明したらよいのだろうか。意味を解釈できないし、いたずら書きともみえない。先程、別の本である可能性を否定したが、出来損ないの偽物という可能性を考えるべきなのであろうか。

いささか首を捻った後、当館所蔵本(写真1)の「ヨ」があった筈の位置と「ヒ」の位

置が、綴じ目を挟んでほぼ線対照にあたることに気が付いた。「ヒ」と思っていた字は、「ヨ」の第一画が失われた状態で剥ぎ取られ、裏返しに貼りついているのではなからうか。全体に広がる茶色の染みは水を被った痕だと考えれば、貼りついてページが開かなくなった過去があったと考えてもおかしくはない。早速、当館所蔵本と左右反転写真とを比べると、残っている部分の形が一致する(写真3)。そして、「ヨ」をよくよくみなおすと、たしかに紙が裏向きに貼りついていたのである。同様に「不知して」の欠損部分も、線対称の位置にあった「天爵」が裏返しに貼りついている(写真4)。「爵」の欠損部分は、補修時に誤って、別の文字(前丁2行目の「至」。当館所蔵本では該当箇所が欠損している)で埋めてしまったらしい(写真5)。

つまり、①井上の所蔵する原本(破損前の当館所蔵本)をもとに、昭和3年に複製本(写真2)が作成された。②その後、原本は水を被って貼りつき、開かなくなるページも生じた。③原本を補修した際、補修しきれずに貼りついたページの一部が裏返しのまま残った。それが当館所蔵本(写真1)と考えれば矛盾はない。不自然な違いの理由が判明して、一件落着した。当館所蔵本は、井上通泰の旧蔵本で間違いなかったのである²。

この話、実は昨秋の展示会「あの人の直筆」準備での一コマである。楽しい驚きだったのでご紹介した次第。なお、本号には展示会の報告とフロアレクチャーの様子も誌上再録している。あわせてご覧いただきたい。

(利用者サービス部人文課 おおぬま よしき)

1 井上通泰(1866-1941) 歌人、国文学者、眼科医。民俗学者柳田國男の兄。古典籍の収集家としても知られる。

2 当館は自筆原本購入と同時に(昭和23年5月28日)に、江戸時代版本<請求記号862-32>と、昭和3年の複製本(今回紹介した本の複本。<請求記号862-33>)を購入している。これらも井上の旧蔵本である。

●参考文献

井上通泰「熊澤蕃山先生の筆蹟に就て」『典籍』第2号、大正4年7月
<請求記号 雑14-13>

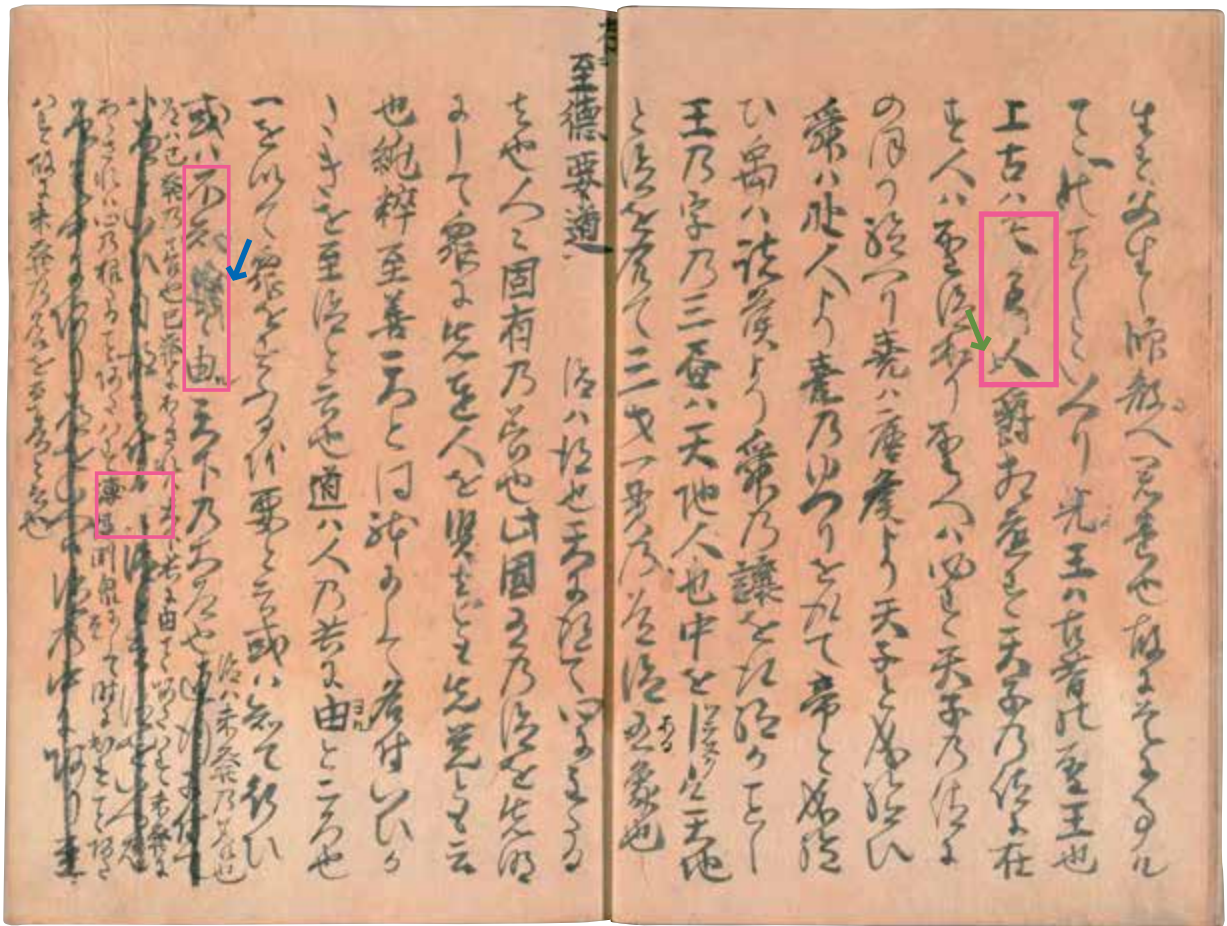


写真1 原本の本文第2丁ウ～第3丁オ。

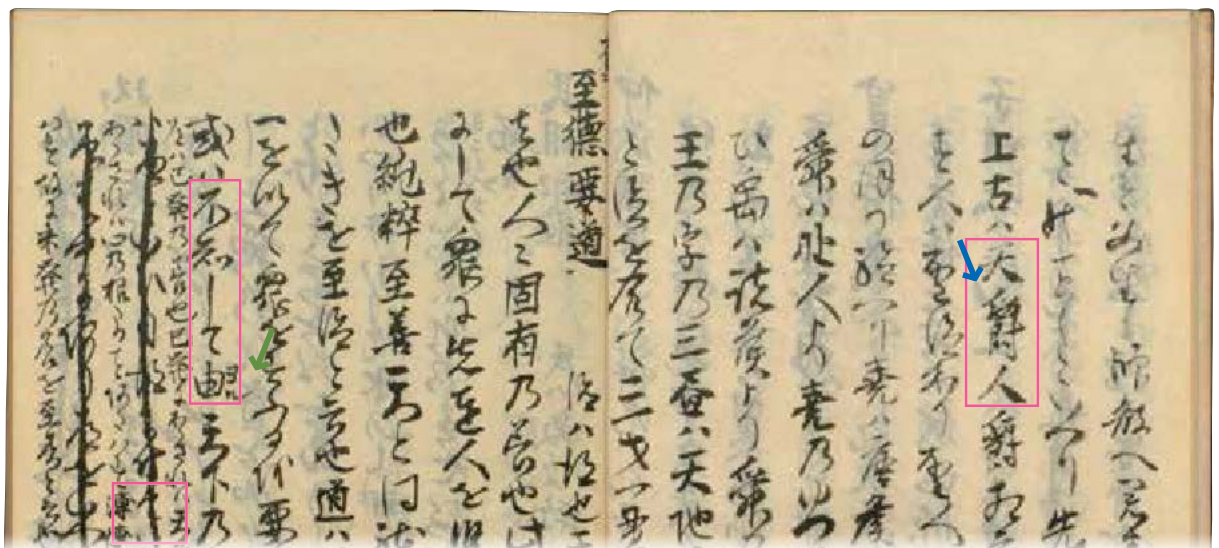


写真2 複製本の本文第2丁ウ～第3丁オ上部。右丁3行目(天爵人)、左丁7行目(不知て由)、8行目(抹消線の引き方)などが写真1と異なる。



左右反転

写真3 写真1右3行目の拡大写真(左)と写真2左7行目の拡大写真(右)。「ㄋ」と「ヨ」を比較していただきたい。



左右反転

写真4 写真1左7行目の拡大写真(左)と写真2右3行目の拡大写真(右)。原本を左右反転させると「天」の二画目・三画目の一部と「爵」ということが分かる。



写真2右丁の前丁より

写真5 写真1右3行目の拡大写真(左)と複製本の本文第1丁ウ2行目の拡大写真(右)。ともに「至」。

特集 資料に見る日仏交流の歴史

- † 電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」
- † フランス国立図書館の電子展示会「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」
- † 国際シンポジウム「日仏交流の過去と現在—国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から」



国立国会図書館は、日本とフランスの交流の歴史をテーマとする電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」を2014年12月に公開しました。また、12月11日には、これを記念して、フランス国立図書館からヴェロニク・ベランジェ氏をお招きし、在日フランス大使館の後援を得て、国際シンポジウム「日仏交流の過去と現在—国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から」を開催しました。本号では、この電子展示会とシンポジウムについて、特集します。

(国立国会図書館展示委員会)

国立国会図書館は、2013年3月にフランス国立図書館との間で、図書館活動の各分野における包括的な協力協定を締結しました。協力の一環として、両館の所蔵資料を基にした共同電子展示会を実施することで合意し、作成に取り組んできました。そして、昨年12月に、国立国会図書館が電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」を、フランス国立図書館が電子展示会「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」をそれぞれ公開しました。

日本とフランスの交流は、安政5(1858)年に締結された日仏修好通商条約により国交が開かれて以来、150年以上にわたって積み重ねられてきました。日本は、近代化に不可欠な技術や制度をフランスに

学び、芸術や生活スタイルの面でも大きな影響を受けてきました。また、フランスでは、日本の美術・工芸が愛好され、背景をなす思想や文化についても深く研究されてきました。戦争による中断を挟みつつも、両国の間には、今日に至るまで互いの文化に対する憧れと関心が持続してきたと言えます。

2014年には、長年にわたり日仏の文化・学術交流の拠点となってきた東京の日仏会館が創立90周年を迎え、「日仏文化協力90周年」を祝うさまざまな行事が開催されました。このような記念すべき年に、両国立図書館が共同で電子展示会を作成・公開したことは、大変意義深いことと言えます。

電子展示会

「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」



この電子展示会では、19世紀半ば以来の日仏両国の交流の歴史を反映する、約200点の資料を掲載しています。ここでは電子展示会の構成に沿って、その内容を簡単にご紹介します。

序 日仏交流の幕開け

幕末の日仏修好通商条約が両国の国交の始まりであったことは、すでに述べたとおりです。江戸幕府内では、勘定奉行・小栗忠順^{ただまさ}らを中心にフランスへ接近を図る動きがあり、駐日フランス大使レオン・ロッシュの協力を得て、横須賀造船所が建設されます。また、幕府はロッシュの勧めに従い、1867年のパリ万国博覧会に使節を派遣します。序では、鎖国下で描かれたナポレオン・ボナパルトの肖像や、来日したフランス人の動静を記した町奉行所の記録、日本最初の本格的な仏和辞典、パリ万博参加者が持ち帰った写真などを紹介しています。



資料紹介

Poèmes de la libellule
(1885)
西園寺公望が、フランスの女流作家ジュディット・ゴーチエとともに古今和歌集を抄訳したものの、『蜻蛉集』の和名がある。挿絵は山本芳翠。
<請求記号 KH9-B13>

第1部 日本の近代化とフランス

第1章 政治・法律

近代日本の法律や制度については、一般にドイツの影響が強いと言われます。しかし、特に初期の段階においては、フランスに学んだことも多いのです。この章では、明治初期に翻訳されたモンテスキュー、トクヴィルら思想家たちの著作や「東洋のルソー」と称された中江兆民の関係資料、民法典の編纂にあたったギュスターヴ・ボアソナードが残した草案などを紹介しています。



資料紹介

『東洋自由新聞』創刊号 (1881)
中江兆民、西園寺公望らがフランスから帰国後に創刊した、急進的自由主義に立つ新聞。自由民権運動に影響を与えた。
<請求記号 WB43-169>

第2章 産業

幕末にフランスの援助で始まった横須賀造船所の建設は、明治政府に引き継がれ、当時国内最大の官営工場として産業の近代化に多大な影響を与えました。昨年6月にユネスコ世界文化遺産に登録された富岡製糸場も、フランスからの技術移転で建設されています。この章では、横須賀造船所の附属教育機関で使用された教科書や富岡製糸場の女工による回想記、幕末にパリ万博に派遣された日本資本主義の父・渋沢栄一の日記などを紹介しています。

第2部 文化の日仏交流

第1章 文学

明治以降、多くの作家たちがフランスへ渡航し、その体験を作品に残しています。それらの作品は、日本人のフランスへの憧れが形成される上で決定的な役割を果たしました。また、フランスの文学作品も多数翻訳され、日本の近代文学に大きな影響を与えました。この章では、永井荷風『ふらんす物語』、与謝野鉄幹・晶子『巴里より』、島崎藤村『平和の巴里』など日本人作家の作品のほか、日本で最初にフランス語原典から翻訳された文学作品である川島忠之助訳『八十日間世界一周』や、来日したフランス人作家ピエール・ロチの作品などを紹介しています。



資料紹介

Dodoitsu (1945)
1921年から27年まで駐日フランス大使を務めた詩人ポール・クローデルの翻案による日本俚謡集。挿絵は、在仏の画家ハラダ・リハク。
<請求記号 KR153-A54>

第2章 芸術

明治時代になって西洋美術の本格的な受容が始まります。芸術を志す人びとを惹きつけてやまなかったのが、芸術の都パリでした。この章では、黒田清輝、浅井忠、中村不折、萩原守衛らフランス留学を経験した芸術家たちの作品を多数紹介しています。また、藤島武二、橋口五葉らの挿絵やフランスに日本美術を紹介した画商・林忠正の活躍、フランス音楽の受容などについても取り上げています。

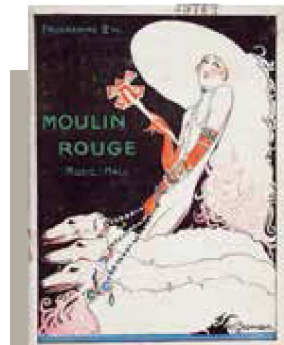
人びとの交流 (コラム)

日仏交流は、両国間を往き来した多くの人びとによって担われました。このコラムでは、西園寺公望、ポール・クローデル、九鬼周造、大杉栄、きだみのる、加藤周一など、両国の文化の深い理解に達したと思われる人物を取り上げます。彼らは、フランス(日本)を体験することで、自らの感性や思考を大きく変容させています。人物相互の関係にも着目しながら、関係資料を紹介しています。



「^{うま}美し国」フランスへの憧れ (コラム)

フランスは、近代日本において、生活スタイルやサブカルチャーの次元でも、強い憧れの的となってきました。このコラムでは、料理、ファッション、映画、レビューとシャンソンの4つの分野におけるフランスの影響を紹介しています。これらの分野におけるフランスの影響は、今日に至るまで続いており、日本人の抱くフランスのイメージは、「美し国」“Douce France”であり続けてきたのです。



資料紹介

Moulin Rouge music-hall
(1925)
ムーラン・ルージュにおける当時のスター、ミスタンゲット主演レビューのパンフレット。蘆原英了コレクション所収。
<請求記号 VA251-402>

電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」の作成

国立国会図書館におけるこの電子展示会の作成作業は、2013年6月にスタートしました。国立国会図書館の電子展示会は、特色あるコレクションの存在を前提に企画されることが多いのですが、今回の場合、テーマに関係する資料群が事前に特定されていたわけではなく、ひとつずつ資料を選定するところからのスタートとなりました。

まず日仏交流史に関する参考文献を読み進め、分野間のバランスや全体の規模を考慮しつつ、構成と出展資料を決めていきました。

最終的には、「政治・法律」「産業」「文学」「芸術」の4分野を中心とし、2部4章の構成を定めました。また、江戸時代における交流や軍事に関する話題、パリ万国博覧会等、上述の4分野に収まらないトピックについては、別に「序」を立て、さらに人的な交流に着目したコラムと、生活スタイル、サブカルチャーに見られるフランスへの憧れを取り上げたコラムを作成することとしました。出展資料として計約200点を選定し、これらに付ける解説は分担執筆しました。なお、構成や資料の選定については、専門家の立場から中央大学の三浦信孝教授に助言を頂きました。

電子展示会ウェブサイトは、日本語・フランス語・英語の3つの言語で提供することとし、洗練されたデザインとわかりやすいナビゲーションを心がけました。また、参考文献リスト、関連年表、人物索引を設け、調べものに役立つよう工夫しています。特に人物索引には、500名近い登場人物をすべて収録し、その多くには肖像を掲載して眺めて楽しめるものになっています。トップページには、フランス側の電子展示会へのリンクを設けています。

電子展示会「近代日本とフランス」

<http://www.ndl.go.jp/france/>



トップページのデザインについて

電子展示会のトップページは、地球をイメージした球面の向こう側に、エッフェル塔やムーラン・ルージュなど日本人のイメージするフランスの景物を配し、富士山の見える手前側に腰かけた洋装の婦人がそれを遠望するというデザインとなっています。タイトルの赤、背景の白、ページ下部の帯状の青でトリコロールを表し、言語を選択する際に表示されるトンボの画像で日本を表しています。トンボは、古くは「あきつ」と呼ばれ、『古事記』や『日本書紀』には日本の象徴として登場します。19世紀のフランスでジャポニスム（日本趣味）が流行した際には、エミール・ガレらの芸術家によって、トンボをモチーフとした作品が数多く製作されています。

フランス国立図書館の電子展示会 「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」



国際シンポジウム「日仏交流の過去と現在—国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から—」におけるヴェロニク・ベランジェ氏の報告をもとに、フランス側の電子展示会をご紹介します。

フランス国立図書館には、18世紀以来、東洋の書物の巨大なコレクションが構築され、1795年には敷地内に東洋語学校が設立されるなど、東洋学研究の一大拠点となってきました。1863年には、フランスにおける日本学の開祖となったレオン・ド・ロニーによって、日本語の講義が開始されています。その前年、ロニーは、江戸幕府の使節団の一員としてフランスを訪れた福沢諭吉らに図書館を案内しています。

電子展示会「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」は、フランス国立図書館の豊富な日本関係資料を背景に、これらの資料へのポータルサイトとなることを企図して作成されました。取り上げた資料は、写本、刊本、古写真、版画（浮世絵やその影響を受けたフランス人版画家による作品）、地図、工芸品（能面等）、録音資料など、多様な形態にわたります。対象となる時代も、マルコ・ポーロの『東方見聞録』から岡倉天心の『茶の本』の最初の翻訳まで、非常に長期間に及んでいます。

フランス国立図書館の日本関係資料には、目録が作られていなかったものも多くありますが、今回のプロジェクトを機に目録整備が進み、かなりの規模



「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」 <http://expositions.bnf.fr/france-japon/>

のデジタル化も実施できました。

ウェブサイトの構成について、もう少し具体的に紹介しますと、例えば「テーマ別に見る」というコーナーの「イメージの中の日本人」のページでは、古写真や浮世絵が見られます。鎖国時代にオランダ人によって描かれた絵画であるとか、明治時代に輸出品のために作られたポスターなどもあります。このほかにも、資料の内容に即して、いくつかのテーマが立てられています。また、検索機能についても充実させました。例えば、「Hokusai」という語で検索をかけますと、葛飾北斎に関する書物や北斎工房の絵画、《富岳百景》の最初の版やエドモン・ド・ゴンクールによる北斎の伝記などが表示されます。

そのほか、重要な資料として、版画家アンリ・リヴィエールによる有名な《エッフェル塔三十六景》もデジタル化して紹介しています。連作浮世絵やジャポニズムの時代の有名な雑誌『芸術の日本』などととも、「アルバム」というコーナーに収めています。



ヴェロニク・ベランジェ氏

フランス国立図書館日本資料担当司書。フランス国立古文書学校において日本書誌学を専攻。2000年に国立国会図書館において受託研修を受講。2001年からフランス国立図書館司書として、『酒飯論絵巻』研究プロジェクト等に参画。『『酒飯論絵巻』の世界：日仏共同研究』（共著）など。

今回のプロジェクトをきっかけに、フランス国立図書館の日本関係資料のデジタル化が進んだこと、関連分野の専門家たちの間にネットワークが生まれたことは大きな成果と言えます。来年も引き続き作業を実施し、ポータルを拡張します。日本語ページも設けていますので、この機会にフランスにおける日本のイメージに触れていただければと思います。



「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」より



(BnF) Bibliothèque nationale de France

フランス国立図書館とは…

1368年に設置された国王シャルル5世の私文庫にさかのぼる長い歴史を有する図書館です。フランスでは、1537年に国王フランソワ1世によって法定納本制度が開始され、現在約1,400万点の資料・約2,400名の職員を有する世界有数の図書館となっています。首都パリのフランソワ・ミッテラン館（本館）、リシュリユール館（手稿、版画、地図、古美術等を所蔵）を中心に、4つの図書館で構成されています。

国際シンポジウム

「日仏交流の過去と現在

—国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から—



国際シンポジウムでは、国立国会図書館とフランス国立図書館から、それぞれ電子展示会の作成について報告があった後、日仏交流史の専門家を交えてパネルディスカッション「日仏交流の諸相—近代的制度、産業技術と芸術文化を中心に」が行われました。

ディスカッションへの導入として、コーディネータの三浦信孝氏によるショートスピーチ「日本の近代化とフランスの影響」が行われました。

日本の近代化とフランスの影響

2014年は、日仏会館の創立90周年にあたります。日清・日露の戦争を経て、条約改正を果たした日本は、アジアにおけるさらなる権益拡大を求めて第一次世界大戦に参戦しました。パリ会議後に成立した国際体制において、新たな強国として登場した日本を重視して、フランスは文化外交・学术交流の可能性を探ります。1921年には、詩人外交官として知られたポール・クロードルが駐日大使に着任していますが、当時の日本をめぐる国際環境を考えると、日英同盟の廃止、ドイツとの戦争、ロシア革命、米国における排日機運の高まりなどから、フランス





三浦信孝氏

中央大学教授。フランス文学・思想専攻。『近代日本と仏蘭西：10人のフランス体験』（編著）など。

がプレゼンスを高める余地があったわけです。クローデルにとって、フランス領インドシナの極東学院に次ぐ文化拠点をアジアに確保することは、優先度の高い課題でした。

さて、日仏会館の創立にあたり財政面で支援したのが、実業界の大御所・渋沢栄一でした。渋沢は、1867年のパリ万国博覧会に幕府が派遣した使節に随行しています。この体験をもとに日本資本主義の父となり、また民間外交の推進者となるわけです。

明治時代に来日したピエール・ロチ以来、日本に魅せられたフランス作家は数多いのですが、クローデルほど日本に影響されて自分の作品を書いた作家はいなかったと思います。彼が創立に関わった日仏会館は、90年の歴史を通じて、両国の相互理解に多大な貢献をしてきました。

日仏修好通商条約から第一次世界大戦のころまでを日仏交流における第1期、日仏会館の創立にはじまる両大戦間期を第2期、戦後を第3期とみることができます。日仏会館では、これまで第1期と第2期の交流について、それぞれ人物に焦点をあててシンポジウムを開催してきました。第1期には渋沢栄一、西園寺公望、中江兆民、黒田清輝、永井荷風、

第2期には大杉栄、九鬼周造、藤田嗣治、金子光晴、横光利一、岡本太郎らが重要な役割を果たしています。これらの人物については、国立国会図書館の電子展示会で紹介されていますので、ぜひご覧ください。

幕末・明治期の日仏文化交流について—フランスからの技術移転

パネルディスカッションの冒頭、西堀昭氏から幕末・明治期のフランスからの技術移転に関する報告がありました。

フランスからの技術移転の中心に、ちょうど2015年に、建設が始まってから150年を迎える横須賀製鉄所（造船所）があります。横須賀製鉄所は、その準備工場のような位置づけで建設された横浜製鉄所と合わせて、フランスから技術導入をおこなった生野鉦山や富岡製糸場の建設・運営を支えました。

横須賀製鉄所や生野鉦山は、付属の学校をもち、フランスからの技術移転が教育とセットになったものであったことがわかります。フランスの高等専門教育機関であるグランド・ゼコールから卒業生が各分野に技術者として招かれ、指導にあたりました。



西堀昭氏

横浜国立大学名誉教授。日仏交流史専攻。『日仏文化交流史の研究：日本の近代化とフランス』など。

生野鉦山の学校からは、後に画家として活躍した高島得三（北海）が出ています。また、富岡製糸場は学校も併設した伝習工場であり、ここで学んだ女性たちが各地の製糸業の発展に寄与しています。このように、技術移転にあたっては人材育成が非常に重視されていたことがわかります。

2014年6月にユネスコ世界文化遺産に登録された富岡製糸場では、横須賀製鉄所の製図工であった川島忠之助が通訳として活躍しました。川島は、後にジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』を翻訳していますが、これは日本で最初のフランス語からの文学作品の翻訳です。このように教育とセットになった技術移転の影響は、各分野に及んだのです。

和古書から日本文化を知る—フランスでの和古書の調査、展示、出版と研究活動

続いて、クリストフ・マルケ氏からフランスにおける和古書コレクションに関する報告がありました。

私の所属機関であるフランス国立東洋言語文化研究学院（INALCO）は、ベランジェさんの報告にもありましたとおり、1863年にフランスで最初に日



クリストフ・マルケ氏

フランス国立東洋言語文化研究学院（INALCO）教授。日本美術史・出版文化史専攻。『日本の文字文化を探る：日仏の視点から』（編著）など。

本語教育を始めた機関になります。本日は、フランス人が和古書を通じて日本について学んできたという側面について報告したいと思います。

フランスにおける和本の収集は、日本語教育の開始以前に始まっています。19世紀前半にコレージュ・ド・フランス(Collège de France)の中国語教授であったアベル・レミュザの蔵書には、すでに絵入り事典『^{きんもろうずい}訓蒙図彙』等数点の和本が含まれていました。これらは、オランダ人を通じて入手したようです。

現在のフランス国立図書館の和本コレクションは、ベランジェさんのいらっしゃる写本室に1740年代以降に収集された絵巻、奈良絵本、写本、版本等が約800点（1,800冊）あり、その中にはシーボルトの旧蔵書の一部も含まれています。また、版画室には、パリで和本を入手しやすくなった1840年代以降に購入されたり、寄贈された版本約3,500冊が所蔵されています。この中には、ジャポニズム時代の代表的な絵入り本コレクションであるデュレ・コレクションや江戸文学の研究のために構築されたトロンコワ・コレクションが含まれます。トロンコワは、明治時代半ばに10年以上日本に滞在し、黒田清輝らと交流したことが知られています。

私は、20年以上前からフランス各地の図書館における和本関係の展示会に関わってきました。特に、2007年にフランス国立図書館で開催された「禁書」の展示会には、日本の春本を出展し大きな反響を呼びました。フランスでは、パリ装飾美術館図書室、パリ国立美術学校図書室、ギメ東洋美術館図書室、大学間共同利用言語・文化図書館（BULAC、旧INALCO図書館）等にも、和本のコレクションが所蔵されており、日本の研究者の協力も得ながら、目録の整備に取り組んでいます。また、出版社と協力して、日

本の絵本（絵入り本）のフランス語訳・複製出版にも取り組んでいます。研究の面では、日仏会館を拠点に日仏共同研究を実施し、その成果を刊行しています。

今後の課題としては、フランスの和本総合目録の整備やデジタル化の実施が挙げられます。今回の共同電子展示会の作成により、デジタル化が進んだことは喜ばしいことです。一次資料を活用した研究が進展することを願っております。

フランス国立図書館蔵『酒飯論絵巻』の共同研究プロジェクト

続いて、マルケ氏の報告のケーススタディとして、ベランジェ氏から『酒飯論絵巻』の日仏共同研究に関する報告がありました。

『酒飯論絵巻』は、室町時代に成立した絵巻物で、「上戸」と言われる酒好きの人、「下戸」と言われる飯好きの人、どちらもほどほどに嗜む「中庸の徳」を説く人の3者がそれぞれ持説を述べあうという内容の、パロディ的な要素を含む作品です。2010年からフランス国立図書館の研究プログラムに採択され、INALCO等フランス国内の機関や名古屋大学をはじめとする日本の大学からも参加を得て、3年間の共同研究を実施しました。その成果は、日本とフランスで刊行されています。

フランス国立図書館所蔵の写本は、特に重要なもので、現在では失われた狩野元信による原本に忠実な写本とされています。共同研究には、食文化や美術史、文化史など幅広い分野の研究者が参加し、描かれた食事の図から当時の食生活を読み取るなど、まさに、共同研究ならではの豊かな成果が得られたと思います。

その後、参加者からの質問にパネリストがコメントする形で討議が進められました。フランスに日本美術を紹介した林忠正の活躍や日仏相互の関心の非対称性などが話題となりました。



本稿でご紹介したとおり近代日本とフランスの交流は、広いすそ野をもっています。両国関係を振り返る際の基礎資料として、共同電子展示会をご活用いただければ、これに勝る喜びはありません。



シンポジウムのプログラム

報告1 日本におけるフランスのイメージの形成—電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」の紹介
渡邊幸秀（国立国会図書館利用者サービス部司書監）

報告2 フランスにおける日本文化受容の一側面—フランス国立図書館の電子展示会プロジェクト
ヴェロニク・ベランジェ氏

ショートスピーチ 日本の近代化とフランスの影響
三浦信孝氏

パネルディスカッション 日仏交流の諸相—近代的制度、産業技術と芸術文化を中心に

コーディネータ：三浦信孝氏

パネリスト：ヴェロニク・ベランジェ氏、クリストフ・マルケ氏、西堀昭氏、渡邊幸秀



なお、在日フランス大使館のご厚意により、「アンスティチュ・フランセ関西／京都」所蔵の作家のサイン本等を会場前に展示しました。

シンポジウムの資料を以下のURLに掲載しています。
<http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/20141211lecture.html>



あの人に会えた！

企画展示

あの人直筆 報告



伊三
スト
ル
壇
屋
大
も



「豪快なイメージのあの人がこんな小さな字を書くとは驚きでした」
「教科書や大河ドラマに登場する人が、本当に生きていた人なのだと実感しました」—アンケートからは、時をこえて「あの人」に会えた驚きや喜びが伝わってきます。

平成 26 年 10 月 18 日から 11 月 18 日まで、東京本館で開催した企画展示「あの人直筆」は、大盛況のうちに終わりました。本誌 643 (2014 年 10 月) 号では主な展示資料をご紹介しましたが、本号では、会期後だからこそお伝えできる内容を集めてみました。人気だった体験コーナー、観覧した方や取材に来た記者の方にその良さを教えていただいた隠れた名品、そして客員調査員による誌上フロアレクチャーなど、会期中の熱気あふれる会場の様子をお楽しみください。

【】内は請求記号

(展示委員会企画展示小委員会)

国立国会図書館デジタルコレクションで展示資料に再び出会えます

展示会は終了しましたが、展示資料の一部は、国立国会図書館デジタルコレクションからご覧いただけます。その多くは、全てのページがデジタル化されていますので、展示されていたページ以外も見ることもできます。

本誌面では、以下のアイコンで示しています。資料には検索でもたどりつけますが、以下のように URL を直接入力すれば、見たい画像に直接アクセスできます。



デジタルコレクション
pid/3856383

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3856383>

国立国会図書館デジタルコレクション

また、ホームページに簡易図録、出展資料一覧を掲載しています。http://www.ndl.go.jp/jp/event/exhibitions/1207039_1376.html

あの人に会えた！

伊三
スト
ル
壇
屋
大
も

「あの人」のモデル！?

今回の目玉「亡友帖」。坂本龍馬、中岡慎太郎、木戸孝允らにまじって、佐久間象山を暗殺したことで有名な「人斬り彦斎（げんさい）」こと河上彦斎（1834-72）という人の筆跡が貼り込まれています。明治3年1月に長崎県小参事であった石田英吉に宛てたものと思われます。彦斎は、人気漫画『るろうに剣心』の主人公のモデルだそうです。
【石田英吉関係文書 1-13】



デジタルコレクション
pid/3856391/1



ギャラリートーク

季武客員調査員のフロアレクチャー（p.18 参照）のほかに、職員によるギャラリートークも4回、行いました。



異国で迎えた誕生日

いろいろな形態の日記のコーナーで、5年連用日記の例として出展した、海軍軍人阿部勝雄（1891-1948）の日記。開いたページは自身の誕生日で、なんと、デコレーションつきです。昭和20年、満54歳の誕生日には、阿部は、日独伊三国同盟軍事委員としてドイツに駐在しており、第二次世界大戦末期、負けそうなドイツに、残った潜水艦を同盟国である日本に譲ってほしいという無茶な依頼をしなければなりません。遠い異国で迎えた誕生日、自分で自分を祝うしかなかったのかもかもしれません。
【憲政資料室収集文書 1371-2】

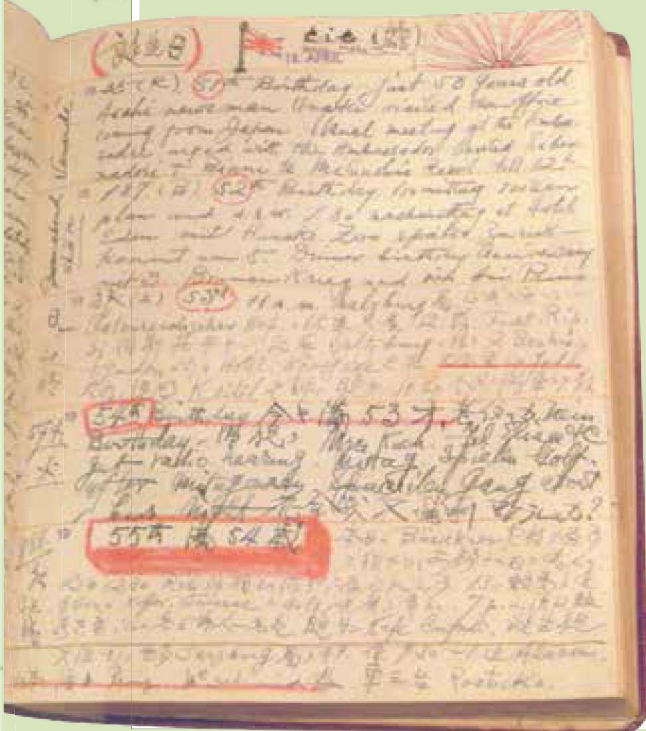


レプリカ

デジタル画像から、簡単なレプリカを6点作成し、自由に手にとって読めるようにしました。また、亀田次郎が所蔵していた徳富蘇峰編のお誕生日帳【159.8-To454t】には、自分の名前を書きこめるようにしました。イラスト入り、「あの人」になりかわっての書きこみなど、みなさんと一緒に作った一冊になりました。

この厚さで一通！

一通で、なんと7.5mもある木戸孝允（桂小五郎 1833-77）書簡です。岩倉使節団として欧米歴訪中の木戸から、日本の井上馨に宛てたもの。明治維新当時の苦難や犠牲の回顧に始まり、当時ワシントン駐在だった26歳の森有礼を引き合いに出しながら、日本の拙速な開化政策が内面の意識と伴わないことを非難しています。文末には、「長夜鬱々のあまり愚意吐露つかまつり候」とあり、生真面目な人柄がうかがえます。【井上馨関係文書 357】



文字なぞり

与謝野晶子、坂本龍馬、徳川齊昭の文字をパウチしたものを机に貼り、上に半紙を置いて、筆ペンでなぞるコーナーです。なぞっているうちに「あの人」になれるような気がするかも！？人気のコーナーでした。



クイズ

署名部分の拡大画像の下には、扉が。扉をあけると、名前と写真で、誰の文字かわかります。読めそうで読めず、扉をあけて「あの人か！」と驚く方が多かったようです。



横文字との格闘

十分な辞書も教科書もないまま外国語を学び始めた幕末の人々は、筆で、慣れない横文字を写していました。下は、思想家・西村茂樹(1828-1902)による英語 - 広東語辞典の写しです。細字で丁寧に写し、朱字で増補し…直筆を目の当たりにすると、その努力に圧倒されます。【827-128】

デジタルコレクション
pid/2538032/6



翻刻

今回の展示はくずし字が多かったので、すべてではありませんが、現代の文字に直したものをケースの中や上に配置しました。みなさん熱心に展示資料と対照していました。



豆知識

展示資料を見ると、せいぜい100年ぐらい前の手紙でも、字や体裁が今と全く違うことに驚きます。その理由を知って、少しでも「あの人」との距離を縮めていただくために、書体や文房具の歴史などを簡単に紹介した吹き出し状のパネルを作成し、関係する展示資料の近くに掲示しました。



カミソリ大臣の愛妻ぶり

陸奥宗光(1844-97)が海外留学中、後妻の亮子に「写真を送って」「週に一回は手紙ちょうだい」と記したラブラブな手紙です。【陸奥宗光関係文書 55】

デジタルコレクション
pid/8737525/2



Facebook はじめました 国立国会図書館の展示（東京・関西）

昨年9月17日、「国立国会図書館の展示（東京・関西）」というFacebookページをはじめました。当館でFacebookページを作成するのは、吉田家文書修復事業につづき、2例目です。

展示会は、テーマに沿って資料を選んで紹介する事業です。見てもらわなければ意味がありません。しかし、ホームページ上で公開している電子展示会は、古いものや階層の深いものにはなかなかたどりつきにくく、また、イベントとして開催する展示会も、数多くのイベントが開催されている昨今では、なかなかメディアに取り上げてもらえません。かといって車内広告でも出そうものなら、目が飛び出るような高額な費用が必要になります。

無料で、自分たちでできる広報ってなんだろう。——SNSがあるじゃないか！

そこで、Facebook上にページを作りました。まずは、企画展示「あの人の直筆」の宣伝です。資料選定の様子、会場設営の様子などを紹介し、会期が始まってからは、フロアレクチャーの様子や隠れた名品を日々紹介しました。

当初、「いいね！」を押して読者になってく

れたのは、じつは当館職員です。しかしそこから、当館職員とつながっている他の図書館の方が「いいね！」を押してくれました。すると、だんだんとその方の知り合い、知り合い…と広がっていきます。会期が始まってからは、歴史ファンの方にも広がりました。文書関係の機関、近隣の機関が紹介してくださったことも、アクセス数増加の一助となりました。

Facebookのいいところは、アクセス数だけでなく、どのような方が読者なのかがわかることです。「いいね！」を押してくださった方のページを見ると、「坂本龍馬好き」などといった趣味嗜好がある程度わかり、どのような記事がどのような層にアピールできるのかがつかめて、「読者の顔が見える」ことを実感します。

現在は、電子展示会コンテンツや、過去の展示会の簡易図録など、直後は注目されても日々どうしても埋もれていってしまうコンテンツから、その日その日にちなんだものを選び、週2回程度更新しています。お正月には、お正月を描いた名所錦絵や双六の展示会を紹介しました。新しい展示会の情報もいち早くお届けする予定ですので、みなさんも是非「いいね！」を押して、国立国会図書館の知られざる資料の情報をキャッチしてください。

（サービス企画課展示企画係 てんじろう 2世）



てんじろう
展示郎



<https://www.facebook.com/NDLexhibition>

あの人直筆

誌上フロアレクチャー

季武 嘉也

(国立国会図書館客員調査員、創価大学文学部教授)



「書は人なり」「心正しければ則ち筆正し」。文字はコミュニケーションのための記号ですが、現在でも携帯メールで多くの絵文字が使用されているように、人々は単なる記号にいろいろな意味を込めようとしてきました。ましてや直筆には、芸術的な上手下手だけでなく、そのような言外の熱い思いが包含されています。ここでは、平成 26 年 10 月 18 日～11 月 18 日に当館で開催された企画展示「あの人直筆」でフロアレクチャーを担当した者として、誌上でそれを復元しようと思います。

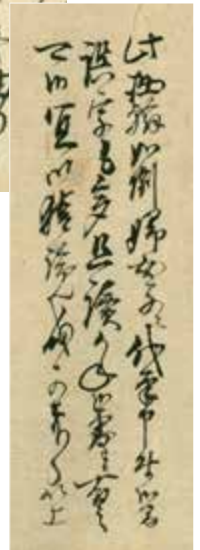
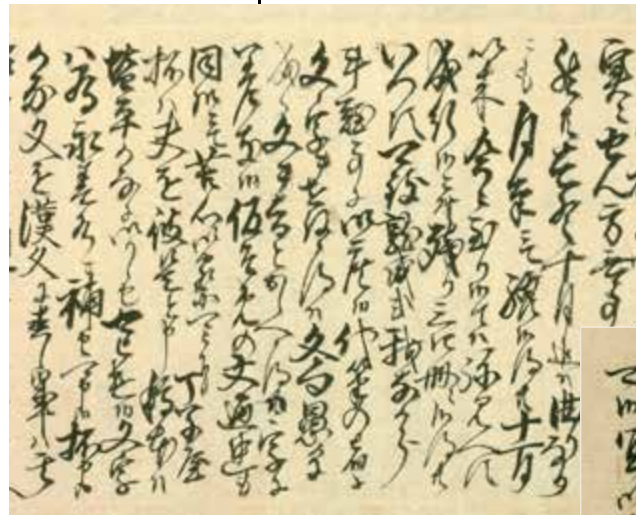
具体的にみていく前に、一つだけ日本の江戸～明治時代の書風について紹介しておきましょう。「売り家と唐様で書く三代目」という川柳があります。江戸時代に普及した書風は御家流（青蓮院流）でした。これは、14 世紀の尊円法親王に発する流派ですが、これが江戸庶民の間でさらに独自の発展を遂げ

て、歌舞伎・寄席などに使用される江戸文字になります。しかし、武士やお坊さんなどインテリは、それしか知らない庶民との違いを示そうと、わざと草書・行書・楷書など中国式の書体を使用しました。前述の川柳は、大きな商店でも三代目になると育ちがよく教養はあるのだが、商売が下手で店を売りに出すことになり、その際に「売り家」と書いた文字が立派な中国式（唐様）であったことを揶揄したものです。御家流は幕府の公用文字であったため、明治時代では薩長政府から嫌われて衰退し、かわりに中国の書家の文字が強い影響力を持つようになりました。

では、今回展示したのものの中から、いくつかを選び一点ずつご紹介しましょう。

右は曲亭馬琴の書簡となっていますが、実際に本文を書いたのは息子の嫁の路（みち）女です。武士出身の馬琴は非常に几帳面な性格で、宛名人である友人の殿村篠齋に自分の近況を詳細に書き送っているのですが、この頃、彼は目が不自由になり、字を書くのに苦労していました。そこで、早く死んでしまった長男の嫁に代筆させたのです。

まず、右下の返し書きの部分を見て下さい。これは馬琴自身が書いた字です。そして内容としては、誤字も多く読みにくくて申し訳ないと書かれています。一方、本文の代筆させた部分にも「文字を教えれば文章がおろそかになり、文章を教えれば文字にさしつかえる」とまで書かせています。なんとも身勝手な舅ですが、字も文章も大事にする教養人としてのプライドがあったのでしょうか。もっとも、馬琴が路女ばかりに代筆させていたため、彼の妻がそれに嫉妬し、家庭内には波風が立っていたといわれています。



曲亭馬琴

代筆 路女

▲曲亭馬琴書簡[14]
【WA25-27】
(右、返し書き部分)

デジタルコレクション
pid/2570450

デジタルコレクション
pid/2585747/8

▼徳川斉昭書簡（『水府名家手簡』[1]）〔江戸後期〕12月21日
【WA25-94】

徳川斉昭

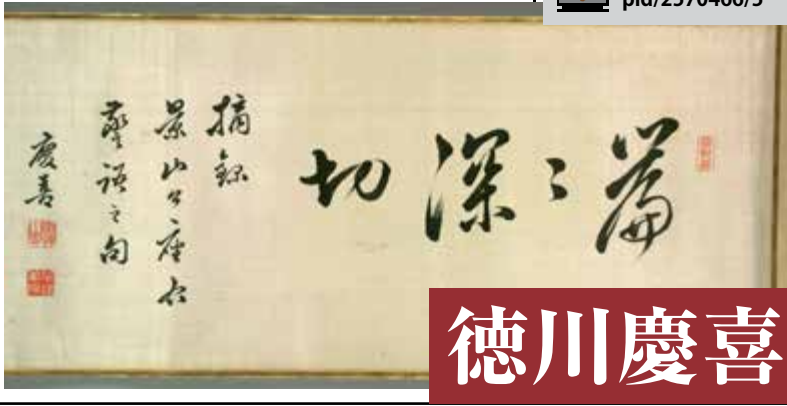
つぎに、徳川斉昭・慶喜の書を紹介します。徳川斉昭は御三家水戸藩の藩主で、徳川慶喜の実父です。ご覧のとおり、文字は独特で力強いのですが、性格も「烈公」の諡に恥じることなく豪快な人物でした。藩政改革に大きな功績があり、さらに幕政にも参画するようになるのですが、井伊直弼と対立して蟄居を命じられそのまま死去しました。虎の尾のように跳ね上がる「也」の字は、斉昭がしばしば使用したものです。

もう一方の徳川慶喜は、いうまでもなく最後の徳川将軍です。この書は、明治になってから斉昭の書簡集を作成するにあたり、慶喜が題字を執筆した時のものです。こちらの字は、素人目ながらも繊細で美しい唐様のものです。親子の書を比較してみますと、時の流れが字に如実に表れているように思われます。

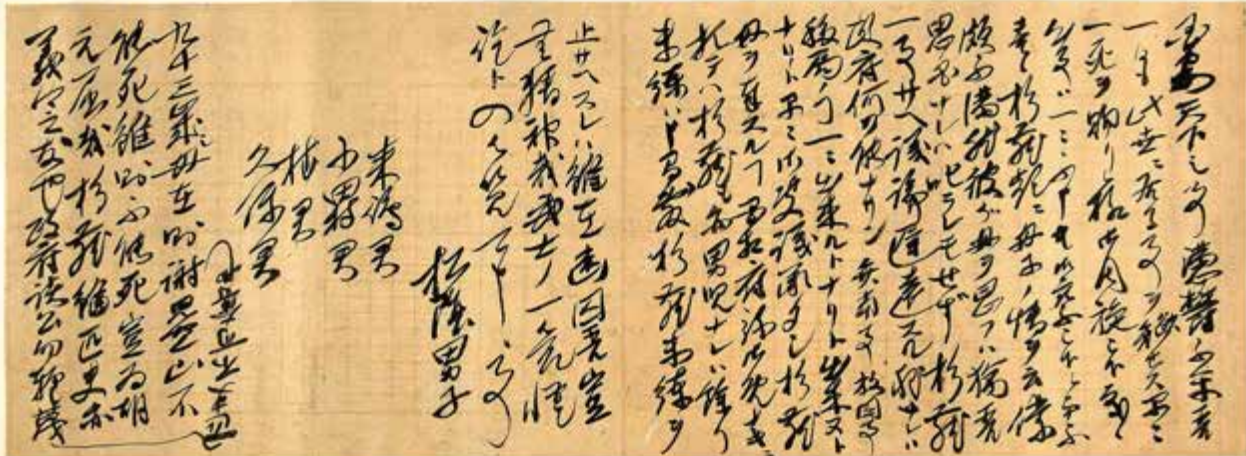


▼徳川慶喜題字「篇々深切」（『源烈公真筆』[1]）〔明治時代〕【WA25-29】

デジタルコレクション
pid/2570466/5



徳川慶喜



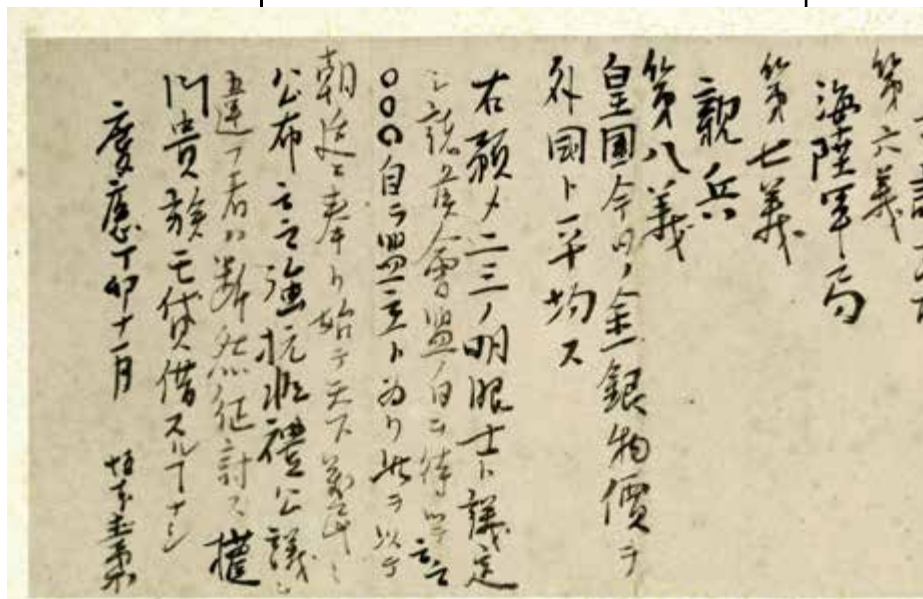
吉田松陰といえば、死を恐れぬ純情な実行主義者で、言行一致の陽明学の影響を強く受けた人物です。上の書簡は、安政6（1859）年に野山獄から、交流の深かった木戸孝允らに送ったもので、伏見要駕策で失敗し投獄された愛弟子入江九一（杉蔵）について書かれています。伏見要駕策とは、参勤途上の藩主毛利敬親の行列を京都伏見で止め、そのまま朝廷に連れて行き天皇から勅を得て幕政を改革しようとする計画で、その無謀さにはあの高杉晋作ですら反対したほどでした。しかし、松陰以上に純情な入江九一は、それを実行しようとしました。ただし、実行直前で母親を心配した入江は、自分ではなく弟野村靖に実行させたのですが、結局、本人も投獄されることになったわけです。

この書簡で松陰は、自分はこの世にいることを欲せずと死を覚悟し、また母を案じて放免を求める入江に不満を示しつつも、その心情は自分が国を思うのと同じなので叱ることもできないと、彼にしては珍しく歯切れが悪いものとなっています。

▲吉田松陰書簡 安政6（1859）年3月
【井上馨関係文書634-2】

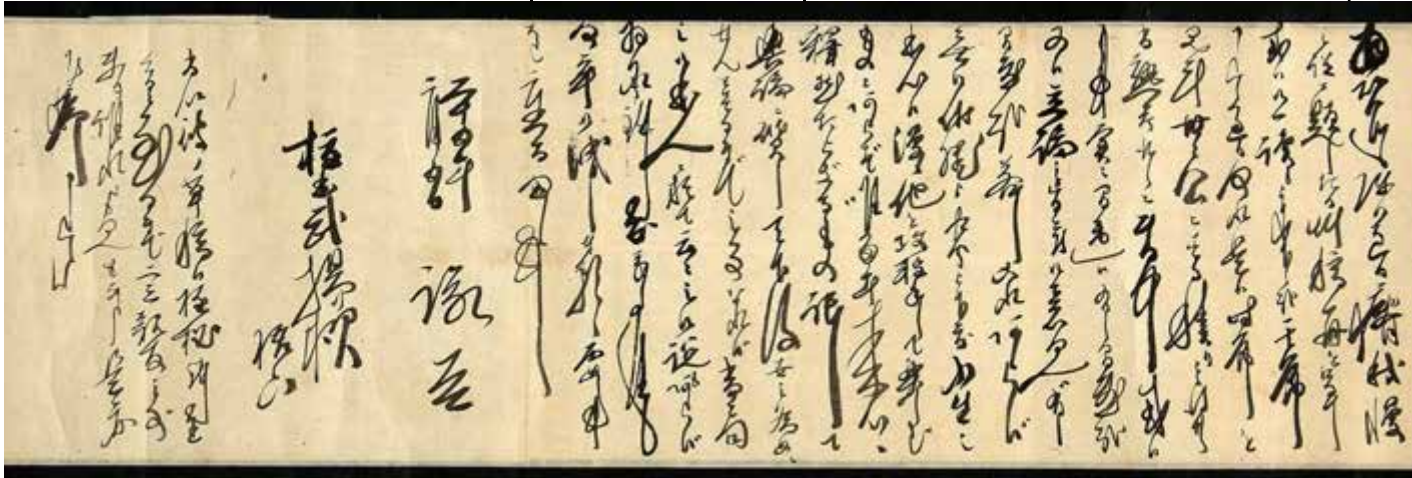
慶応3（1867）年6月に、坂本龍馬を中心に船の中で構想されたという、かの有名な「船中八策」は発見されていません。下船直後、龍馬が後藤象二郎と相談してその構想をまとめたものが『海援隊始末』に活字化されていますが、これも原典はありません。下に示した「新政府綱領八策」は、同年10月の大政奉還の直後、そして龍馬暗殺の10日前に、龍馬自身が書いたものです（同文のものが下関市立長府博物館にもあります）。現在では、これこそが「船中八策」に近いものであろうと考えられています。この

坂本龍馬



福沢諭吉

デジタルコレクション
pid/8737515



「新政府綱領八策」は、土佐藩出身で海援隊にも参加し、のちに高知県知事となった石田英吉が中岡慎太郎・高杉晋作など、かつての仲間の書を集めて軸装した『亡友帖』という巻物の中にあります。

文中に「○○○自ラ盟主ト為リ」とあります。ここに入るのは山内容堂、徳川慶喜などの説もありますが、最近では特定の人物にこだわっていなかったのではないか、という説が有力です。その方が、小事に拘泥せず大事を成し遂げようとする龍馬のイメージに近く感じられます。

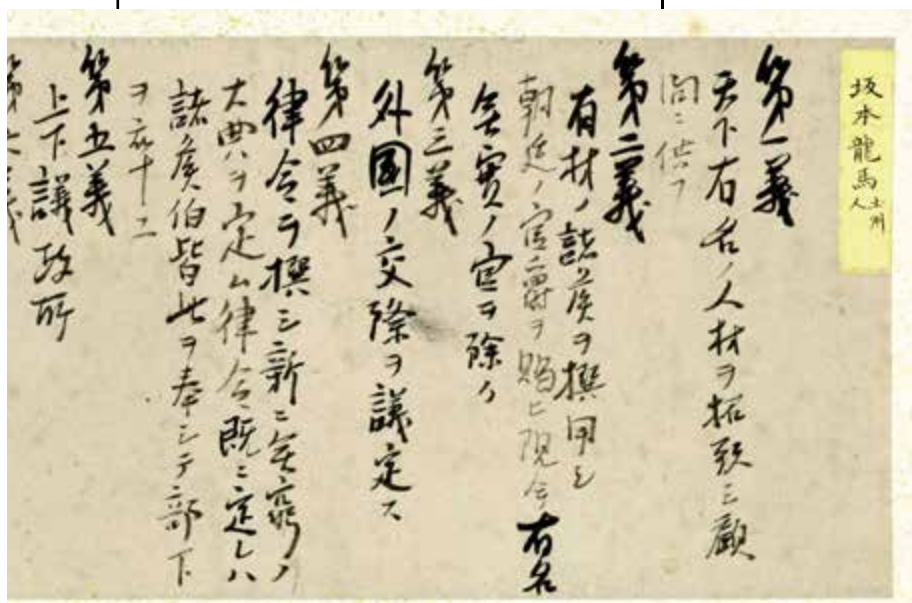
▲福沢諭吉書簡 明治25 (1892)年2月5日
【榎本武揚関係文書25】

上は明治25 (1892)年に、福沢諭吉が榎本武揚に宛てた書簡で、前年に福沢が執筆した「瘠我慢の説」について、榎本の答弁を求めた内容となっています。元来、福沢や榎本そして勝海舟らは幕臣だったのですが、御存じのように明治維新後、榎本・勝は政府に出仕して大臣にまで昇り詰めます。「瘠我慢の説」とは、武士たる者はやせ我慢をしてでも敵軍と戦うべきであり、また降伏後は敵の陣営に加わるべきではない、これこそが日本固有の主義である、と榎本らを非難したもので、福沢はこの原稿を榎本らに送り、反論を求めたのです。

ご覧の通り、福沢の字は非常に流れるように美しいと思うのですが、どことなく江戸文字的な雰囲気があって庶民的な感じもします。これは私見ですが、元幕臣で在野の人間としての福沢の、明治政府に対する意地がここから読み取れないでしょうか。当時の最高知識人でありながら、庶民の世界にも通じた福沢らしさも感じます。なお、この福沢の書簡に対して、榎本は「いづれ返答」としたまま結局返答せず、勝は「われ関せず」と返書したそうです。

デジタルコレクション
pid/3856383

▼新政府綱領八策（『亡友帖』のうち）慶応3 (1867)年11月
【石田英吉関係文書1-5】

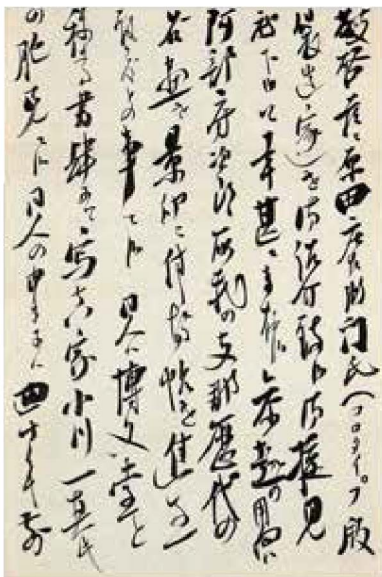


つぎに、日本憲政史上の2人の立役者の書を紹介します。まず右の原敬の書簡ですが、内容は、大正3（1914）年に彼が政友会総裁に就任するに際し、長州閥井上馨に今後の支援を求めたものです。原はもともと井上と近い関係なので当然といえば当然ですが、このような藩閥長老への細かい気配りは彼の政治姿勢をよく表しています。原の手法は藩閥と華々しく闘うのではなく、現実問題で一つずつ相手を追い詰めるというもので、そのため新聞・雑誌での評判が悪く、「今日主義者」というレッテルを貼られました。下の書簡の執筆者犬養毅は、逆につねに理想を説いて民衆の前に立ち、藩閥と闘う姿勢を示しました。そのため、ジャーナリズムからは「理想主義者」として高く評価されました。

両者を比較しますと、原の字は斜めに書かれたりしているように、美しさに拘泥している様子はなく、現実主義者らしい感じを受けます。他方、犬養は筆の特徴を上手に活かした唐様の美しい字だと思えます。じつは犬養は書家としても有名で、選挙に際しては自分の書売ってその資金に充てていました。

犬養毅

デジタルコレクション
pid/8737528



▲犬養毅書簡〔大正14（1925）～昭和6（1931）年頃〕
7月6日【牧野伸顕関係文書（書簡の部）124-1】



▲原敬書簡 大正3（1914）
年6月18日

【井上馨関係文書246-4】
*この資料は、平成27年2月現在、
デジタル化されておりません。

原敬

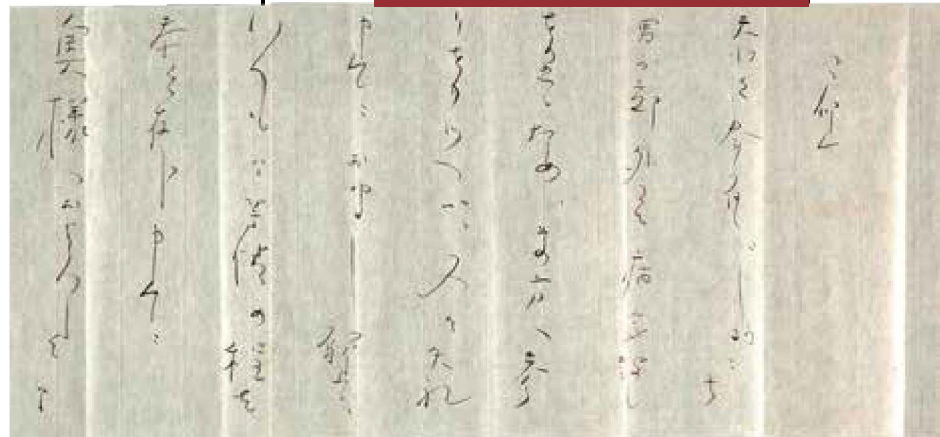
与謝野晶子といえば、官能的な『みだれ髪』、あるいは出征する弟への率直な心情を吐露した「君死にたまふことなかれ」などロマン派歌人として有名です。また晶子の夫で、「妻をめとらば才たけて」と歌った与謝野鉄幹もやはりロマンチックな人物で、いろいろと艶聞がありました。しかし、結婚後の両者は家庭的で仲睦まじく、12人の子供にも恵まれました。そして、夫に収入の無いとき、晶子は一生懸命働きながら子供も育てました。この書簡は、子供の看病のため「失礼」したことを詫言ったものです。

大正期に、母性保護論争というのがありました。平塚らいてうが妊娠・出産・育児期の女性には国家が金銭的に保護すべしと「母性中心主義」を主張すると、晶子はそれは「依頼主義」であり、女性は男性にも国家にも寄りかかるべきではないと、女性の自立を主張しました。細くて弱々しそうな字の向こう側に、このような強い心があるとは驚きです。

与謝野晶子

デジタルコレクション
pid/8737520

▼与謝野晶子書簡 昭和2
（1927）年3月28日
【鶴見祐輔関係文書（書簡
の部）1111-1】





第 17 回関西館小展示
「明日のレシピはフルコース
～作りたい味を見つけよう」

関西館小展示の開催とその「再利用」

関西館では、年に2回程度の頻度で小展示を開催しています。この小展示は、関西館の職員で構成する関西館展示小委員会が企画し、開催しています。

展示の開催においては、テーマを決め、展示する資料を選定し、全体の構成や流れを考え、解説パネルやキャプションを作成したりします。しかしながら展示は開催期間中限りのものです。電子展示は別ですが、現物資料の展示は、いくら多くの人に見てもらいたくても、時間的・空間的制約があります。

そこで考えたのが、展示の再利用です。別名、展示の輸出とも呼んでいます。

そもそものきっかけは、平成24年に関西館開館10周年を記念して開催した企画展示会「関西の図書館100年、関西館の10年」¹でした。この展示に関する資料を集める中で、関西館の近隣にある図書館から多くの協力をいただきました。その際、協力いただいた図書館の中から同様のコンセプトで展示を行いたいとの要望が寄せられました。

その結果、京都府立図書館パネル展示「図書館いまむかし～図書館戦後史 in 京都」、大

阪府立中央図書館企画展示「図書館～過去、現在、そして未来へ～」で当館作成のパネルなどの電子データを提供した展示が実現しました。

これは当館の展示に協力していただいた図書館に、データを提供した例ですが、展示物（資料）の貸出しも行っています²。そのような実例として、平成25年度から26年度にかけて実現した3例を紹介します。

貸出しの対象は、関西館で企画し開催した展示となります。全く同じ形のままの利用である必要はなく、適宜アレンジしたり、一部分として使っていただくことを想定しています。

¹ 関西館の設立構想から現在に至るまでの歩みとともに、明治時代から現在に至るまで、関西地域の図書館の歴史について紹介した展示会。関西館の設立に関する資料や活動の成果物、貴重なコレクションを展示しました。「関西発・知られざる図書館のあゆみ」本誌619（2012年10月）号pp.16-23

² 「国立国会図書館展示会出品資料貸出規則」に従っての貸出しになります。
<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/laws/pdf/a5242.pdf>

第12回関西館小展示 時空をかける三国志



国立国会図書館がやってくる！
「時空をかける三国志」展 in 新長田
平成25年8月22日～10月15日
@三国志ガーデン（神戸市）

まずは「時空をかける三国志」展の再利用です。神戸市長田区は三国志ガーデンのほか、鉄人28号のモニュメントでも知られています。展示会には、3054人の入場者がありました。全体で約150冊の展示資料中90冊が当館から貸し出されたものです。



第13回関西館小展示 花ひらく少女歌劇の世界



記念展示「宝塚歌劇のあゆみ
—誕生から昭和20年代までを中心に—」
平成26年4月1日～5月13日
@宝塚市立中央図書館 聖光文庫

次は「花ひらく少女歌劇の世界」展の再利用です。平成26年は宝塚市にとって市制60周年、宝塚歌劇100周年の節目に当たっていました。記念展示全体で約100冊の展示資料中、15冊を当館から貸し出しました。会場の聖光文庫には期間中、855人の入場者がありました。



第15回関西館小展示 日本酒の近代化と洋酒の国産化



清酒乾杯条例1周年記念展
「日本酒の近代化の歩み」
平成26年10月1日～26日
@伊丹市立図書館「ことば蔵」

最新の事例は「日本酒の近代化と洋酒の国産化 ニッポンの酒造り」展の再利用です。伊丹市は奈良市とともに清酒発祥の地を標榜しており、日本酒乾杯条例を持つ自治体の一つでもあります。当館から貸し出した資料は18点で、期間中の入場者数は766人でした。





第17回関西館小展示

明日のレシピはフルコース —作りたい味を見つけよう—



3月17日まで
関西館で
開催中

小展示
明日のレシピはフルコース
—作りたい味を見つけよう—

1月22日(木)～3月17日(火)
※休館日(日曜・祝日、第3水曜日)を除く

第17回の関西館小展示では、「明日のレシピはフルコース」と題して、宝暦メニエーから、相模、各地料理、明治・大正・昭和初期の料理書など、関西館所蔵のレシピ約570冊をそろえてお待たせしております。

展示会場：国立国会図書館関西館 地下1階閲覧室
展示期間：なし（18時以降の方は受付でお申し出ください）
入場料：無料
開館時間：10:00-18:00(日曜・祝日・第3水曜日は休館)
お問合せ：0774-98-1341(関西館資料部F9:30-17:00)

講演会
お皿の上の近代史
～明治・大正期の料理書をよみとく～
講師：東四柳 祥子氏
3月14日(土) 14:00～16:00

【ハシエチノ】書かされた日本の家庭料理が誕生するきっかけになりました。今回の講演では、東四柳祥子氏(梅花女子大学食文化学部講師)を講師に迎え、明治・大正期の料理書を拾いきながら、異国の食文化と向き合い、旅行記録を綴り残した日本人のドラマをご紹介します。

講演会場：国立国会図書館関西館 地下1階閲覧室
お申込み：①氏名、②所属(個人の場合はなし)、③住所、④電話番号、⑤FAX番号、⑥Eメール(任意)を明記の上、EメールまたはFAXでお申し込みください。
Eメール：k-benji@ndl.go.jp
FAX：0774-98-9106
お問合せ：0774-98-1225

京都府相模郡精華町精華2B-1-3 国立国会図書館関西館
<http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/index.html>

明日のレシピはフルコース
—作りたい味を見つけよう—

入場無料

国立国会図書館関西館 第十七回小展示

全国立国会図書館

現在開催中の第17回の関西館小展示では「明日のレシピはフルコース—作りたい味を見つけよう—」と題し、関西館の所蔵するレシピ本を約570冊、展示しています。

展示といっても、ガラスケースに入れて展示しているのは明治や大正、昭和初期の古い料理書約20冊だけで、残りの約550冊はすべて実際に手に取ることができます。

手に取ってパラパラとページをめくり、色鮮やかな料理の世界に見惚れ「これ食べたい」、「これ作りたい」と思ってもらいたい。そう考えてたくさんのレシピを本棚に並べる方法にしました。

日本伝統の料理や郷土料理に始まり、世界各国の料理やお菓子まで、更にヘルシー料理や定番・簡単料理など、良く知ったものから見たことのない料理まで色とりどりのレシピが並んでいます。アジア関係資料を多く所蔵する関西館ならではのアジアの珍しいレシピも見ることができます。

展示の詳細は以下からご覧ください。
http://www.ndl.go.jp/jp/event/exhibitions/kansai_201501.html

この小展示は3月17日（火）まで関西館地下1階の閲覧室で開催しています。読んで楽しい、作っておいしい。錦繡なすレシピ本の世界をお楽しみください。

(関西館展示小委員会)

本屋に ない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

知られざる世界への挑戦

航海、探検、漂流を記した書物百選
学校法人京都外国語大学創立65周年記念稀観書展示会 展示目録
京都外国語大学付属図書館, 京都外国語短期大学付属図書館
編・刊 2012.5 231p 30cm <請求記号 G61-L1 >

本書は京都外語大学付属図書館が収集してきた27のスペシャルコレクションのうち、「我が国の対外交渉史料」「世界の探検と航海コレクション」を中心に資料を構成して開催された稀観書展示会「知られざる世界への挑戦－航海、探検、漂流を記した書物百選」の出展目録である。航海者や探検者、漂流者が世界を発見し、異文化に初めて接した記録だけでなく、彼らの業績を記した歴史書や伝記も含む、洋書と和書をあわせて100点の歴史的に貴重な稀観書が、各見開き2ページのフルカラーで、日英併記の要を得た解説を付して紹介されている。展示会では、歴史の流れとその時代環境の中で航海者と探検者の実績をさらに捉えやすくするため、当時作られていた地図や地球儀も出展されたという。

1章の「航海」では、近代ヨーロッパの起点となる大航海時代の幕開けを飾ったコロンブスに関する資料『コロンブス伝』、『コロンブスの生涯と航海の歴史』から始まり、『バスコ・ダ・ガマのインド航路発見の航海日誌』、『マゼラン最初の世界周航』がそれに続く。15～16世紀を表す言葉は「大航海時代」の他に、「ルネサンス」「ゲーテンベルグ」などが思い浮かび、それは少し眩い感じがする。一方、地球球体説を誰も実証したことがない時代の、まだ見ぬインド、ジパングを目指す航海は、あらゆるものが不確実であり、その航海は過酷なものだった。マゼランの世界周航では、1519年に総勢270名が乗

り込んだ船団で出発し、マゼラン船長が航海の途中で命を落とすなど様々な困難を経ながらも1522年に世界一周を果たしたときに、帰還できたのは、わずか18人であった。『マゼラン最初の世界周航』は、



帰還者の一人であるピガフェッタによって執筆されたものである。この資料の日本語版は本屋にある本なので、ぜひ購入して読んでみたい。

2章の「探検」では、あのマルコ・ポーロの『東方見聞録』やシーボルトの『日本』が紹介されている。他の資料についても絵や地図などを中心に引用されているので、当時の海外から見た日本の様子についても窺い知ることができる。

3章の「漂流」では、日本から外国への視点となる。海難事故等で漂流後に九死に一生を得て、外国滞在后、苦勞の末に帰国した日本人による、海外の文化・社会状況、漂流の顛末などについての口述や取り調べを記録したものが掲載されている。鎖国の時代背景の中、偶発的に得た貴重な経験が時には重宝され、時には監視される原因となった。きっと波乱万丈の人生だったであろう。しかし、その結果、圧倒的な視野の広さを手にすることができたのではないかと想像できる。

この美しい資料を手に取り、時空を超えて知的好奇心を満たしてみたい。

(利用者サービス部科学技術・経済課 橋本 貴之)

※入手に関するお問い合わせ先
雄松堂書店 電話 03(3357)1411

館長庵野秀明特撮博物館

ミニチュアで見る昭和平成の技

スタジオジブリ 編 日本テレビ放送網 刊

2012.7 191p 22×28cm

<請求記号 KD652-L7>

幼いころ、1960年代後半～1970年代のウルトラマンシリーズが再放送されていて、かなり夢中になって見ていました。そんなノスタルジーに惹かれて、特撮の技術をテーマにした展覧会の図録である本書を手にとりましたが、冒頭から単なる懐古趣味に終わらない強い目的意識を目の当たりにし、思わず襟を正しました。

「映像の文化は完成品としてのフィルムだけじゃないと思うんですよ。その制作過程の技術や産物も文化として遺すべきものじゃないかと思います。中には芸術と呼んでもいいものもあると思うんです。しかし、現状では、次々と失われてしまっている。本当に憂うべき現状です。」

「館長」庵野秀明が、巻頭のインタビューで語る言葉が、本書を生み出した思いを端的に表現しています。作品はビデオ、DVD、ブルーレイと形を変えて残っても、その制作を支えたミニチュア技術は、CG技術が発展していく中で失われつつある、という危機感。その中で特撮の技術を保存し、継承していくとする使命感にも似た思いに溢れています。

続く監督、美術、カメラマンというそれぞれの立場で特撮に関わった方々のインタビューからは、裏方の苦労や撮影時のノウハウ等、映像を楽しんでいるだけではわからない、当時の作り手たちの思いが伝わってきます。現場での工夫が思わぬ効果を生んだ話などは、アナログ感の残る特撮ならではのエ

ピソードでしょう。

そしていよいよ図録のメインである展示品のコーナーへ。数々の



機械・乗り物のミニチュアやヒーローのマスク、デザイン画などが続々と登場します。正直なところ、見たことも聞いたこともない映画・ヒーローも多々あります。ただそういった作品も含まれていることで、特撮という技術の広がりによって改めて気付かされます。どの資料も、特撮を振り返るにあたり貴重なものとして楽しく眺めました。

展覧会の会場では、庵野氏企画の特撮映像も上映されていたとのこと。図録と実際の展示とは違いますが、現物の持つ迫力やファンの熱気など、会場でしか感じ取れないものが多数あったらと思うと東京での開催時に足を運べなかったのが惜まれます。

展覧会は、2012年夏の東京会場での開催の後、松山、新潟、名古屋と巡回し、2015年4月から熊本で最後の巡回展が開催されるというロングランを続けています。それだけ、特撮に愛着を持つ人が各地にいるということでしょう。資料を残さなくては、という展示主催者の思いが、ファンに支えられる構図は、たいへん素敵です。自分もファンの一人として特撮を記録した本書の成立を喜びたいと思います。できれば展示を見に熊本に行きたいなあ。

(利用者サービス部政治史料課 藤田 壮介)

※展覧会会場で入手可能
2015年4月11日～6月28日
熊本市現代美術館

第5回科学技術情報 整備審議会



平成26年12月2日、国立国会図書館東京本館において、第5回科学技術情報整備審議会が開催された。委員7名、当館からは館長ほか16名が出席した。安西委員長が欠席のため、あらかじめ指名されていた竹内委員が委員長の職務を代理した。

第四期科学技術情報整備基本計画策定に向けた基本方針検討部会の設置について、安西委員長から提案があったことを事務局から報告し、審議のうえ設置が決定された。竹内委員が部会長に、佐藤委員および村山専門委員が部会員に指名された。

当館から「デジタル時代の科学技術情報整備の現状と課題—第三期科学技術情報整備基本計画における取組を中心に—」、安藤委員から「第5期科学技術基本計画の策定に資する総合的な政策の検討について」を報告した後、質疑および懇談が行われた。

懇談では、「知識インフラ」（国全体の新しい学術情報基盤）について議論がなされた。国立国会図書館には、オープン性を高めて日本国民全体に対してアクセスを確保する基盤を用意する役目があるという意見や、学際領域がますます広がる中で、研究者、一般国民を問わずアクセスできるインフラは重要になるとの意見があった。また、オープンサイエンスの動向の中で、論文も一種のデータとして、研究データや他の様々な情報をリンクさせる「場」の機能を果たしていくと考えられ、今までのように本だけ収集すればよいという時代は終わったと考えるべきという指摘もあった。

審議会に関する情報は、国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 国立国会図書館について > 審議会・科学技術情報整備審議会 (<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/tech/council/index.html>) に掲載している。

科学技術情報整備審議会委員名簿（五十音順 敬称略）（平成26年12月2日現在）

委員長	安西 祐一郎	日本学術振興会理事長
委員長代理	竹内 比呂也	千葉大学副学長
委員	安藤 慶明	文部科学省大臣官房審議官
	喜連川 優	情報・システム研究機構国立情報学研究所長
	倉田 敬子	慶應義塾大学文学部教授
	佐藤 義則	東北学院大学文学部教授
	戸山 芳昭	国際医学情報センター理事長
	中村 利雄	日本商工会議所専務理事
	中村 道治	科学技術振興機構理事長
	藤垣 裕子	東京大学大学院総合文化研究科広域システム科学系教授
	松浦 祥次郎	日本原子力研究開発機構理事長
専門委員	村山 泰啓	情報通信研究機構統合データシステム研究開発室長

**韓国国会図書館、
韓国国会立法調査処
との業務交流(第5回)**

平成26年12月2日～5日、東京本館において標記の業務交流を開催した。韓国国会図書館からパク・チュンジャ氏（国会記録保存所文書・記録サービス課課長補佐）、韓国国会立法調査処からイ・ジョンユン氏（科学・メディア・通信チーム立法調査官）が来日した。

韓国国会図書館とのセッションでは、「議会資料・国会発生情報の収集、保存及び公開」をテーマに、両館の収集・保存する国会発生情報と利用者への電子的提供について紹介し、意見交換を行った。

韓国国会立法調査処とのセッションでは、「情報通信の振興」をテーマに、韓国側から同国の家計における情報通信支出について、日本側から2020年オリンピック・パラリンピック東京大会の開催に向けた情報通信環境の整備について報告し、意見交換を行った。



お知らせ

■ 放送開始90年記念・脚本 アーカイブズ・シンポジウム 「脚本アーカイブズ」の新た なるステップへ ー未来に向けた保存と利用

散逸・消失の危機にある過去の放送脚本の保存・公開を目指した活動が、徐々に成果をあげています。国立国会図書館東京本館では1980年までの放送脚本2万7千冊が整理・保存され、平成26年4月より閲覧公開を開始し、そのほかの公的機関でも公開準備が進んでいます。また、文化資料アーカイブの推進において資料保存のデジタル化について議論がある中、デジタル脚本アーカイブに関連した様々な試みも積み重ねて参りました。最新のデジタルアーカイブの状況を踏まえ、新たなステップをめざす脚本アーカイブズ事業について、シンポジウムを開催いたしますので是非ご来場ください。

○日 時 3月18日（水）13:30～17:00（13:00開場）

○会 場 国立国会図書館東京本館新館講堂

○プログラム 【第1部 座談会】『継承されていく脚本の「魅力」～アーカイブの価値とは』

参加者 三田 佳子 氏（女優）

嶋田 親一 氏（プロデューサー・元フジテレビ）

中村 克史 氏（テレビプロデューサー・元NHK）

山田 太一 氏（脚本家・小説家）

司 会 岡室 美奈子 氏（早稲田大学演劇博物館館長）

【第2部 パネルディスカッション】『文化資源を活かすためのデジタルアーカイブとは？～脚本アーカイブズを中心に』

パネリスト 高野 明彦 氏（国立情報学研究所教授）

福井 健策 氏（弁護士・

日本大学藝術学部客員教授）

大場 利康（国立国会図書館

電子情報部電子情報企画課長）

司 会 吉見 俊哉 氏（東京大学副学長）

○定 員 200名（先着順）

○参加費 無料

○申込方法 ホームページの参加申込みフォームまたはFAXでお申し込みください。



お知らせ

[参加申込みフォーム]

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)

> イベント・展示会情報 > 放送開始90年記念・脚本アーカイブズ・シンポジウム「脚本アーカイブズ」の新たなるステップへー未来に向けた保存と利用（東京本館）

URL <http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/20150318sympo.html>

[FAX]

①イベント名（脚本アーカイブズ・シンポジウム）、②氏名（ふりがな）、③電話番号・FAX番号を明記の上、お申し込みください。

申込先：国立国会図書館 利用者サービス部 音楽映像資料課

FAX 03 (3580) 3559 電話 03 (3506) 5253

○申込期限 3月15日（日）17:00（なお、締切前でも定員となり次第、受付を終了します。）

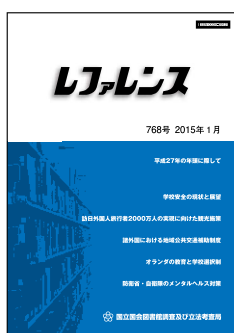
○問合せ先 日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム

電話 03 (5210) 7029

ウェブサイト <http://www.nkac.jp/>

お知らせ

■ 新刊案内 国立国会図書館の 編集・刊行物



レファレンス 768号 A4 123頁 月刊 1,000円(税別) 発売 日本図書館協会
平成27年の年頭に際して
学校安全の現状と展望
訪日外国人旅行者2000万人の実現に向けた観光施策—2020年の東京オリ
ンピック開催を念頭に—
諸外国における地域公共交通補助制度—ドイツ・フランス・英国の事例から—
オランダの教育と学校選択制
防衛省・自衛隊のメンタルヘルス対策—米軍の事例紹介を交えつつ—

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03(3523)0812

訂正

本誌646(2015年1月)号「数字でみる国立国会図書館 『国立国会図書館年報 平成25年度』から」28ページに誤りがありました。

上から3行目

(誤) ※数字は平成25年3月31日現在

(正) ※数字は平成26年3月31日現在

CONTENTS

- 02 <Book of the month - from NDL collections>
Kōkyō shōkai: Original book different from the reprint
- 04 Focus: Overlooking the history of Japanese-French exchanges through collections
- 05 Digital exhibition by the NDL “Modern Japan and France — adoration, encounter and interaction”
- 08 Digital exhibition by Bibliothèque nationale de France “France-Japon: Une rencontre, 1850-1914”
- 10 International Symposium: Past and Present of Japanese-French Exchanges— from the Collections of National Diet Library and Bibliothèque nationale de France
- 14 Meeting “well-known people” at the NDL ! : Report on exhibition “Autograph manuscripts and original artwork of well-known people”
- 18 Exhibition “Autograph manuscripts and original artwork of well-known people” Floor lecture on the monthly bulletin
- 23 Holding and reutilizing small exhibitions in the Kansai-kan

- 17 <Tidbits of information on NDL>
NDL on Facebook: NDL's exhibition (Tokyo Main Library and Kansai-kan)
- 26 <Books not commercially available>
○ *Shirarezaru sekai e no chōsen: Kōkai, tanken, hyōryu o shirushita shomotsu hyakusen: Gakkō Hōjin Kyoto Gaikokugo Daigaku sōritsu 65shūnen kinen kikōsho tenjikai: Tenji mokuroku*
○ *Kanchō Anno Hideaki tokusatsu hakubutsukan: Minichua de miru shōwa heisei no waza*
- 28 <NDL News>
○ 5th meeting of the Council on Organization of Science and Technology Information
○ 5th mutual visit program with the National Assembly Library of Korea and the National Assembly Research Service
- 30 <Announcements>
○ Scripts Archives Symposium commemorating the 90th Anniversary of broadcasting “Scripts Archives taking a new step: Preservation and use for the future”
○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成 27 年 2 月号 (No.647)

平成 27 年 2 月 20 日発行 定価 540 円
(本体 500 円)

発行所 国立国会図書館

編集者 小寺正一

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp発売 公益社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03 (3523) 0812 (販売)
FAX 03 (3523) 0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社ブルーホップ

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌 517 号以降、PDF 版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 刊行物 > 国立国会図書館月報でご覧いただけます。



『省亭花鳥』から「蔭蓋に鶯」
渡辺省亭 画 大倉書店 大正5（1916）年
1冊 28×39cm
「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧になれます
（モノクロ画像）
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/966613/5>

国立国会図書館月報

平成27年2月20日発行（毎月1回20日発行）
（2月号通巻647号）

発売：公益社団法人 日本図書館協会 定価540円（本体500円）